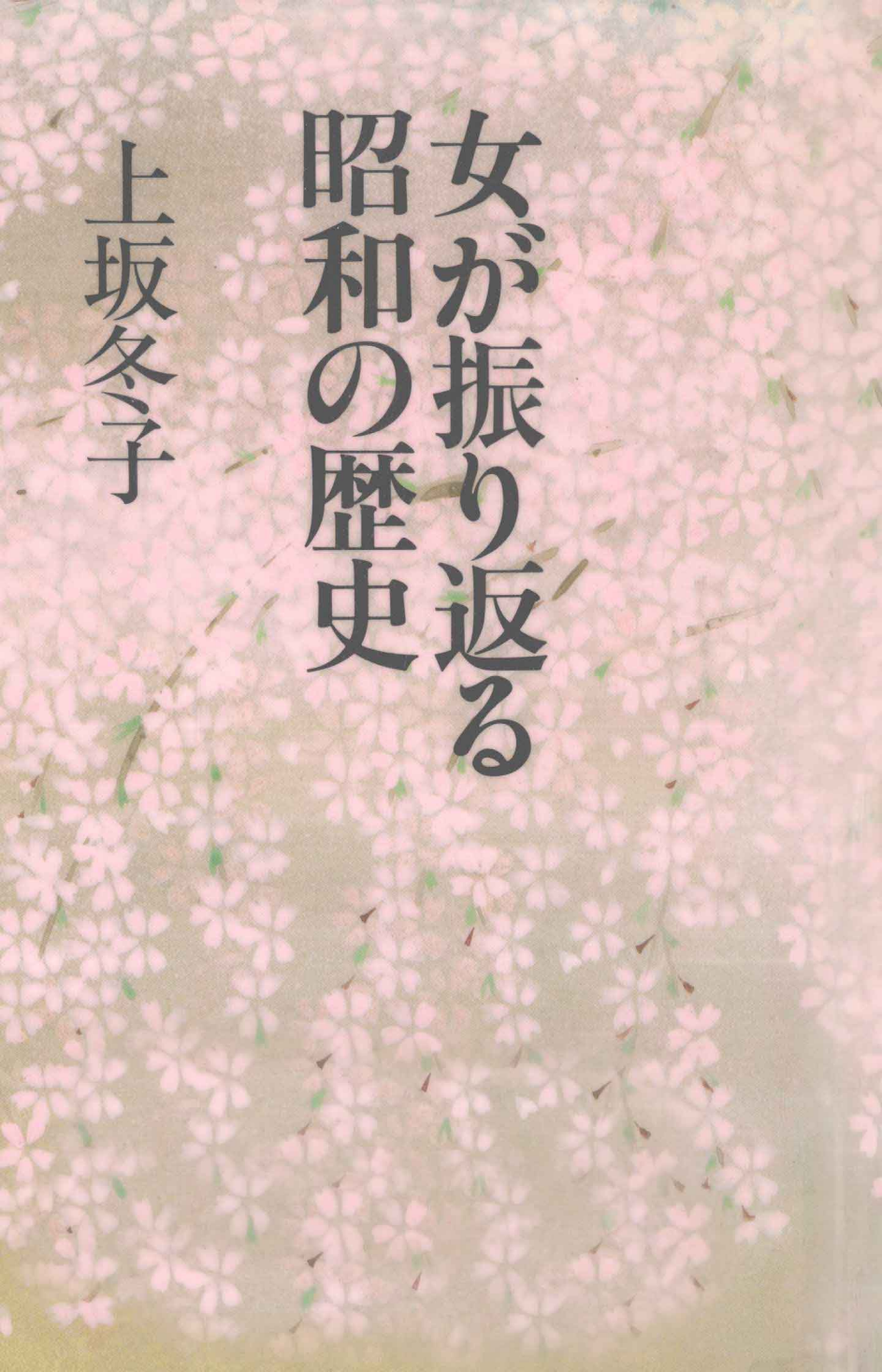
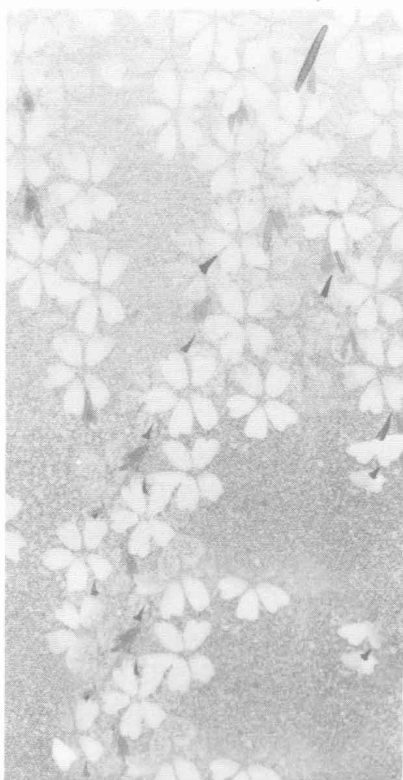


The background of the entire page is a dense, repeating pattern of small, five-petaled pink cherry blossoms. The blossoms are scattered across a light beige or cream-colored background, with some green leaves and brown stems interspersed among them. The pattern is slightly faded and has a soft, painterly quality.

女が振り返る 昭和の歴史

上坂冬子

女が振り返る昭和の歴史



上坂冬子

中央公論社

女が振り返る昭和の歴史

一九八九年二月七日初版発行
一九八九年四月二五日再版発行

著者 上坂冬子

発行者 嶋中鵬二

印刷 三晃印刷

製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二―八―七

振替東京二―三四

©一九八九 検印廃止

ISBN4-12-001764-8

本書は左記の記事を基に大幅に加筆したものです

いま昭和をふりかえる——『婦人公論』にみる女たちの昭和 『婦人公論』昭和六十三年十一月号

天皇を守ったアメリカ人 『中央公論』昭和六十一年五月号

焼け跡の日本を救ったララ物資の生みの親 『中央公論』昭和六十一年十二月号

日本婦道を学んだ満洲娘たち——日満育英会如蘭塾 『中央公論』昭和六十年六月号

上坂冬子著

慶州ナザレ園 忘れられた日本人妻たち

遺された妻 横浜裁判BC級戦犯秘録

一度は有る事

女の胸算用

奄美の原爆乙女

職場の群像 私の戦後史

生体解剖 九州大学医学部事件

愛と反逆の娘たち 西村伊作の独創教育

中央公論社刊

目次

第一部 女が振り返る昭和の歴史……………7

プロローグ

9

昭和元年――

11

昭和恐慌といわれたころ 思想の嵐に吹きま
くられて 戦時下の女性たち

昭和二十年九月――

43

時代も個人も可能性のかたまり 新時代の到来

事件相づく不安な世相 復興の陰に戦争の後遺
症が

昭和二十九年――

もはや戦後ではない 美智子妃決定のニュース
BGからOLへ 「ダンチ族」の誕生

昭和四十一年――

ベトナム反戦と学園紛争 外務省機密漏洩事件
の発覚 国際婦人年の思い出

昭和五十一年――

ロッキード事件の発覚 癌に対する関心が高ま
る 昭和の終息

第二部 伝わらなかった真実

.....

165

天皇を守ったアメリカ人

167

天皇に三回会った男

193

“神国日本”に留学した満洲娘

219

女が振り返る昭和の歴史・年表

247

装幀 中島千波

女が振り返る昭和の歴史

第一部

女が振り返る昭和の歴史

プロローグ

大正時代が終わったのは、年の瀬もおしつまった十二月二十五日であった。その日の午前三時十五分に葉山御用邸で摂政宮・裕仁親王が皇位を継承されて元号が変わったから、昭和元年はわずか七日である。昭和史が実質的にはじまったのは昭和二年ということになり、五年生まれの私にとって、自分と無関係な年月は三年しかない。

私がよくやく誕生日をむかえたころ満洲事変がおこっている。小学一年生の七月には日中戦争が勃発した。入学したのは永田町小学校だが、当時、日本初の鉄筋コンクリート建てと騒がれた同校は、戦災をまぬがれていまも昔とほぼ変わらない姿で東京・永田町の自民党本部の前に建っている。

父は内務省の役人で、私たち一家は指定された官舎に住んでいた。現在、国立劇場の建っているあたりがその場所である。この界限には軍人や役人の家が多かったせいかな、クラスメートには敗戦時の内務大臣・安倍源基の令息や、戦後にA級戦犯として処刑された陸軍大将・板垣征四郎の令嬢がいたのを思い出す。

日米開戦の臨時ニュースを聞いたのは、奈良女子高等師範学校（現・奈良女子大学）付属小学校五

年生のときであった。そのころ父の転勤で私たち一家は奈良に住んでいたが、いまでも私は当時のニュース・フィルムの再現番組などで聞きおぼえのあるあの臨時ニュース開始時のメロデーを耳にする、反射的に関西特有の格子戸と天窓を思い出すのだ。奈良の橿原神宮で「皇紀二千六百年祝典」が行なわれたのは日米開戦の前年のことだが、国をあげて盛り上げたあの祝典もまだ私の記憶には鮮明である。橿原神宮のご神体は神武天皇で、皇紀とは初代神武天皇から数えた年代のことであった。しかも日本は「天に代わって」正義のための「聖戦」をたたかっていると歌にまでうたっていたころだから、その祝典の盛大だったことは筆舌に尽くしがたい。

敗戦を迎えたのは女学校三年生の時であった。ひきつづき新制高校に進んで第一回卒業生として社会に出た私は、以来今日までまさに新生日本の戦後史と歩調を共にして成人してきた。

つまり、これまでの私の人生は自ずと昭和史に重なるのである。

昭和が終わった時点での私なりの試みとして、婦人のための論壇雑誌である『婦人公論』を手がかりとしながら、個人史と昭和史とをないあわせつつ女の目でこの六十余年を振り返ってみたいと思いついた。

昭和元年――

昭和恐慌といわれたころ

まず昭和の黎明にあたる大正十五年とはどんな年であったのだろうか。当時、報知新聞の記者だった御手洗辰雄はいみじくも「流行歌のなかった年」(『婦人公論』大正15年12月号)〔以下この形式の()内の記載はすべて同誌の発行年・月号を示す〕と名づけた。一世を風靡するような流行歌がもてはやされた年は、良きにつけ悪しきにつけうねりのある時代だが、御手洗によれば大正十五年は「創造がない。思いつきがない。神経衰弱」の年であったという。元号が大正から昭和に変わったのは、不景気風が吹いて高い家賃を払えなくなった人々が郊外に移り住み、東京市の中心に「貸家」の貼り紙が目立ちはじめたころと思われる。

昭和二年は金融恐慌からはじまったといつてよい。三月十四日、時の蔵相・片岡直温なのおほるが衆議院予算

総会の席上で、営業中の渡辺銀行が倒産したかのように伝えて物議をかもし、これがきっかけで預金者が銀行に殺到したことから不景気はさらに深刻になった。その影響であろうか産児制限の方法が工夫されて、このころから出生人口が激減している。のちに荻野式避妊法とよばれた荻野久作の「妊娠暦」が発表されたのは大正十三年だが、昭和に入ってから『婦人公論』にも「産児制限の母——年一千の制限実行家柴原浦子女史と語る」などという記事が目につく（昭和5・4）。筆者は三賀静江となっているが、産児制限の口火を切ったマーガレット・サンガーが来日したのは大正十一年のことである。三賀とはサンガーをもじったペンネームかもしれない。インタビュー相手の柴原浦子とは、尾道市のはずれにある尾崎倶楽部で子沢山の漁師の妻たちに避妊法をといて成果をあげている人であった。記事中に掲載された「産児制限の母」の写真は、昭和二年にアメリカの世界親善協会から使節としておくられてきた「青い目の人形」を抱いている。

インタビューによれば、当時の避妊法はいかにも素朴なもので、

問「それでは、いよいよ実際問題に移り、実行方法に就いて伺いたいのですが……」

柴原「……後のたしなみということに就いてであります。講演や説教後の有志婦人の座談会ではよくこのことが話題になりました。いくらか自覚している人々には、このたしなみというのを非常に注意しているのです」

問「たしなみをよくする方法としては？」

柴原「とにかく、すぐ立ち上って体を動かすというだけでも、多少は違います。すぐ……..
……………握り拳でうんという程叩くのであって、それと同時に一生懸命